

# 侍従重衡

ワキ  
梶原景時  
ツレ  
三位重衡  
シテ（女）侍従  
ツレ（女）初花  
季は地は  
春遠江

「定めなき世の中々に。 く。 憂き事や頼みなるら  
ん。

詞 「抑是は梶原平三景時にて候。

サシ 「さても本三位の中将重衡の御事。鎌倉へ具足申す  
べきよし頼朝しきりに宣へば。先づ土肥の次郎実  
平が手より梶原請取り奉り。既に関の東に急ぐな  
り。

下歌 「習はぬ旅に近江路や。 憂き水海の渡舟。 こがれて

物ぞ思はるゝ。

上歌 「さらでだに。 物憂き旅に東路の。 く。 都は跡に  
遠ざかる。 花も名残の春の雁。 それは越路に行く  
旅の。 我は東に思ひ立つ。 名残の山の朝霞。 日も  
隔たりて行末の。 国の名問へば遠江。 池田の宿に  
着きにけり。 く。

ワキ詞 「此所を池田の宿と申し候。

重衡 「げに面白き里の名かな。 時に随ふ世の習ひ。 落ち

ぶれ果つる我姿の。池田の宿とは是かとよ。げに  
や都にて思ひしよりなほ憂かりける東路の。末ま  
だ遠き中宿の。

下歌  
「仮寐あだなる草枕。傾けがたき今宵かな。

地  
「夢に寐て。現に出づる仮枕。く。夜の関戸の明  
暮の。都恋しき我身かな。過ぎにし方も行末も。  
まだ遠江の池田の宿。生けるかひなき浮身かな。  
く。

シテ  
「如何に初花。今日此宿に着き給ふはよしある人よ  
なふ。

初花  
「是は平家の公達三位の中将重衡にて御入り候。

シテ  
「かしましく事も愚や。其身は雲の上人に。

初花  
「袖ふれなるゝ花衣の。

シテ  
「匂ひ満ちくる橘の。

初花  
「雪の浅野の狩場の遊び。

シテ  
「四季折々の慰みをこそ。

初花 「其身のわざとし給ひしに。

シテ 「定めなき世の習ひとて。

初花 「憂き東路の旅衣。日も遙々の旅宿の思ひ。

地 「さこそ涙も重衡の。く。東男に誘はれて。習は  
せ給はぬ旅姿。さこそ御身も。落ちぶれてこそお  
はすらぬ。げにや盛を白露の。色朝顔の今朝まで  
は。花の盛と夕べの秋。名残に近き心かな。く。  
シテ 詞 「旅の習ひとは申しながら。誠に御痛はしう候ふ程

に是なる一筆を。憚ながら上の御目に懸け候へ。

初花 「さん候。如何に誰か渡り候ふぞ。此宿の長者の方  
より。是なる一筆を中将殿の御日にかけ候へと申  
し候。

ワキ 「心得申し候。如何に申し上げ候。此宿の長者の方  
より。此一筆を御目に懸けよと申し候。

重衡 「げにや此程は。思ひ絶えにし鳥の跡。馴れもせざ  
りし一筆の末。よくく見れば面白や。東路の埴

生の小屋のいぶせさに。故郷如何に恋しかるらん。  
あら面白とよみたる歌や候。是は如何なる者の手  
跡にて候ふぞ。

ワキ 「さん候是は大臣殿のまだ当国の守にて御座候ひし  
時。久しく都に召し置かれし熊野が娘。侍従と  
申して海道一の遊君にて候。

重衡 「あらやさしや。さらば此返事を届け候へ。

ワキ 「心得申し候。是は上よりの御返事にて候。

シテ 「馴れぬ心の片田舎。今ぞ始めて都辺の。一筆のゆ  
かりをよくく見れば。故郷は恋しくもなし旅の  
空。何くも終の住家ならねば。あら面白と遊ばさ  
れて候ふや。

初花 「さてこなたよりの御歌をば。何とかよませ給ふら  
ん。

シテ 「東路の埴生の小屋のいぶせさに。故郷如何に恋し  
かるらん。さてこそ返しの御歌に。

二人 「故郷は恋しくもなし旅の空。何くも終の住家ならねば。

地 「げにや何くも仮の宿。く。旅の情の人心。取る盃の御酒一つ。参らせでは叶ふまじ。

ロング地 「げにや日頃は憂き旅の。く。心も変ふる今日の暮。宿の情は大方の。夕べも更に憂からず。

シテ 「林間に酒を暖めて。紅葉たく火は秋の暮。是は弥生の桃の花。三千年と祝ふ君。命は桃の盃。

シテ 「めぐる日影も夕暮の。風のおとづれ誰やらん。恥しながら。

地 「妻戸をきらゝと押しあけて。お側に近く参りつゝ。旅宿のつれぐの。御慰みを申さん。

「如何に初花御酌に参り候へ。

シテクリ 「恥かしや。五障三従の身と生れ。

シテ詞 「妄想の雲あつうして。真如の月も晴れがたく。百千劫の仏身。得がたき事の悲しさよ。

サシ 「唐には。春の花を翫んで専とし。

地 「我朝には秋のあはれを取り立てゝ。明け行く月に袖を触れ。梢の雨草葉の露。あはれを告げずといふ事なし。

シテ 「然るに我等たまゝ受け難き人身を受けながら。殊に拙き女の身の。流れの水を行く船の。さをなぐるまの夢の世の。あぢきなし嘆くまじ。嘆くともかひはよもあらじ。

クセ 「色見えで。うつろふ物は世の中の。人の心の花にぞありける。げに定なき浮世とて。痛はしや此君は。昨日まで花鳥の。友も重衡の。家の名高き雲の上。月の御影を身に受て。

シテ 「星をいたゞき庭鳥の。

地 「あしたを待つや君がため。時を迎へし身なれども。変はる浮世の習ひとて。故郷を立つて遠江の。池田の如何なれば。今宵一夜の仮枕。其夜はかの宿

の。侍従が許に着き給ふ。抑かの侍従が母と申すは。本は屋島の大臣殿の。召し置かれ給ひしが。老母を此宿にとゞめ置き。常は暇を申しゝに。御ゆるされもなかりしに。時は弥生の頃かとよ。如何にせん。(中の舞)

シテ「如何にせん。都の春も惜しけれど。

地「馴れし東の花や散るらん。

シテ「かやうによみしをあはれみ給ひ。

地「御暇賜はり故郷に帰りしは。我母の身の上。此君と申すに。大臣殿の御ゆかりにて渡らせ給へば。

御なつかしやと木綿附の。鳥も鳴き鐘の音も聞えて。夜は明け行けば。さらばとて重衡も。御宿を出で給ひければ。御名残やる方なき心乱れの。恋路に迷ふべき。後の暮ぞ悲しき。この後の暮ぞ悲しき。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション 『謡曲評积 第八輯』 大和田建樹 著